

## 奥州藤原氏の平泉遺跡群の区画施設について

平泉町教育委員会 島原弘征

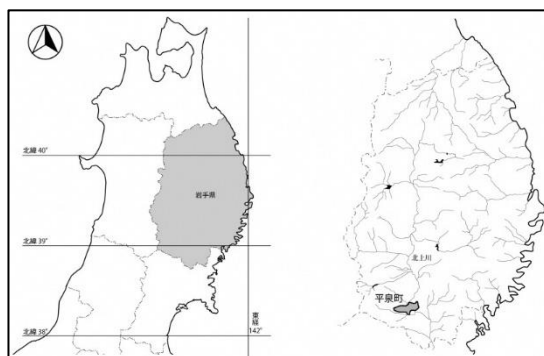
はじめに

今年度、金沢柵推定地である金沢城跡の発掘調査で堀と柵が見つかりました。事務局より奥州藤原氏が拠点をついた平泉で見つかった区画施設についての報告を依頼されました。今回の報告では特に大鳥井山遺跡と立地や区画の様子が似ている柳之御所遺跡と高館を中心に触れていきたいと思えます。

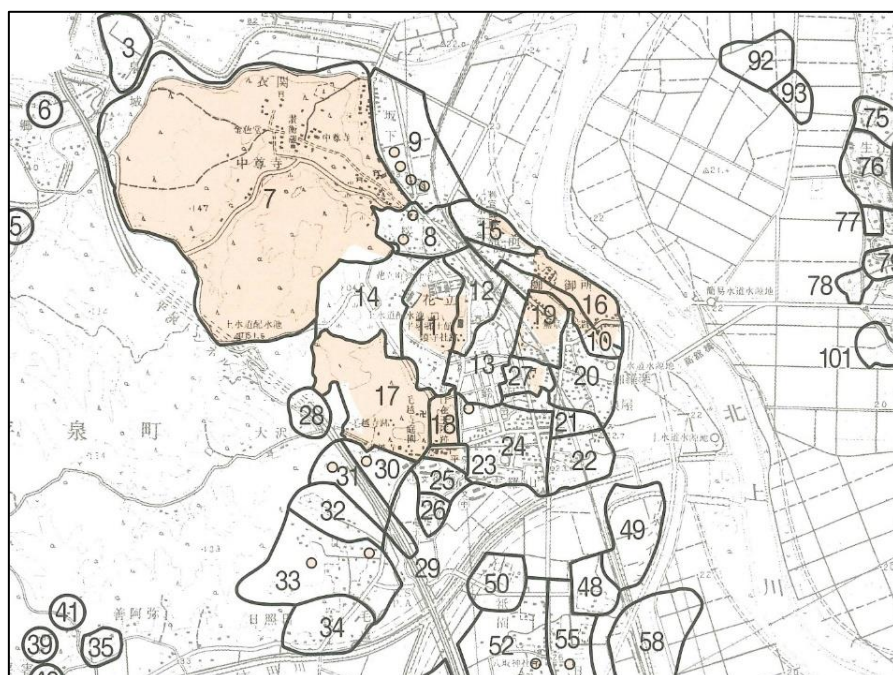
### 1 平泉町の概要

平泉町は、岩手県の南部に所在する人口約7,000人、面積約64平方kmの町です。東側は東稲山、音羽山、観音山が連なる北上山地、西側は奥羽山脈に続く標高100~200m前後の丘陵地に囲まれ、中央部には北上川が南北に流れ、その両側に田園地帯が広がっています。南側を一関市、北側を奥州市に接しています。

平成23年には町内に所在する5つの史跡名勝が「平泉—浄土を表す建築庭園及び考古学的遺跡群—」として世界遺産登録されています。



第1図 平泉町の位置



第2図  
平泉町中心部の遺跡地図

- 7 中尊寺
- 11 金鶏山
- 15 高館跡
- 16 柳之御所遺跡
- 17 毛越寺
- 18 観自在王院跡
- 19 無量光院跡

## 2 平泉の区画施設について

### (1) 柳之御所遺跡

国指定史跡柳之御所・平泉遺跡群（柳之御所遺跡）の中核となる柳之御所遺跡は、奥州藤原氏が平泉の政治・行政を行っていた居館「平泉館」と考えられている遺跡です。この遺跡は北上川の西岸の河岸段丘上に位置し、奥州藤原氏初代清衡の時代にはじまり、三代秀衡の時代に最盛期を迎えた12世紀の居館で、最大幅10m、深さ3m、総延長500m以上の長大な堀に囲まれた南東部（堀内部地区）と、堀の外側に広がる北東部（堀外部地区）に分かれています。

堀内部地区には塀を廻らせ、大型の掘立柱建物跡や池跡、井戸跡等が配置され、遺跡の主要部分を構成しています。堀や井戸からは膨大な数のかわらけが出土し、国産陶器、中国産磁器や、一族や従者とおぼしき人名が記された「人々給絹日記」折敷や「磐前村印」印章に代表される様々な木製品・金属製品等が発見され、当時の暮らしの一端を垣間見ることができます。

柳之御所遺跡の堀は東側で接する北上川以外の三方を2本の堀（外堀・内堀）で囲んでいます。この2本の堀は、かつては二重堀（同時存在）と考えられていましたが、近年の調査で内堀は外堀よりも新しく作られていたことが確認されました。ただし、内堀が設けられた段階での外堀は、人為的に埋められた箇所、自然に埋没している箇所もある一方、完全に埋まり切らずに窪地となっている箇所もあり、場所によって様子が異なることも分かってきました。また、外堀は一度大掛かりな浚渫が行われていることが確認されており、堀の変遷としては、外堀の構築（Ⅰ期）→外堀の浚渫（Ⅱ期）→内堀の構築（Ⅲ期）と大きく3時期の変遷がたどれることが分かってきました（カッコ内の時期は第4図に対応。）。

外堀:大きさは幅5.5～8m、深さ1.8～2.5mほどあります。柳之御所遺跡の西側は猫間ヶ淵と呼ばれる低地が入っていますが、南西側から西側の外堀は堀の位置が猫間ヶ淵と隣接



第3図 柳之御所遺跡（堀内部地区）



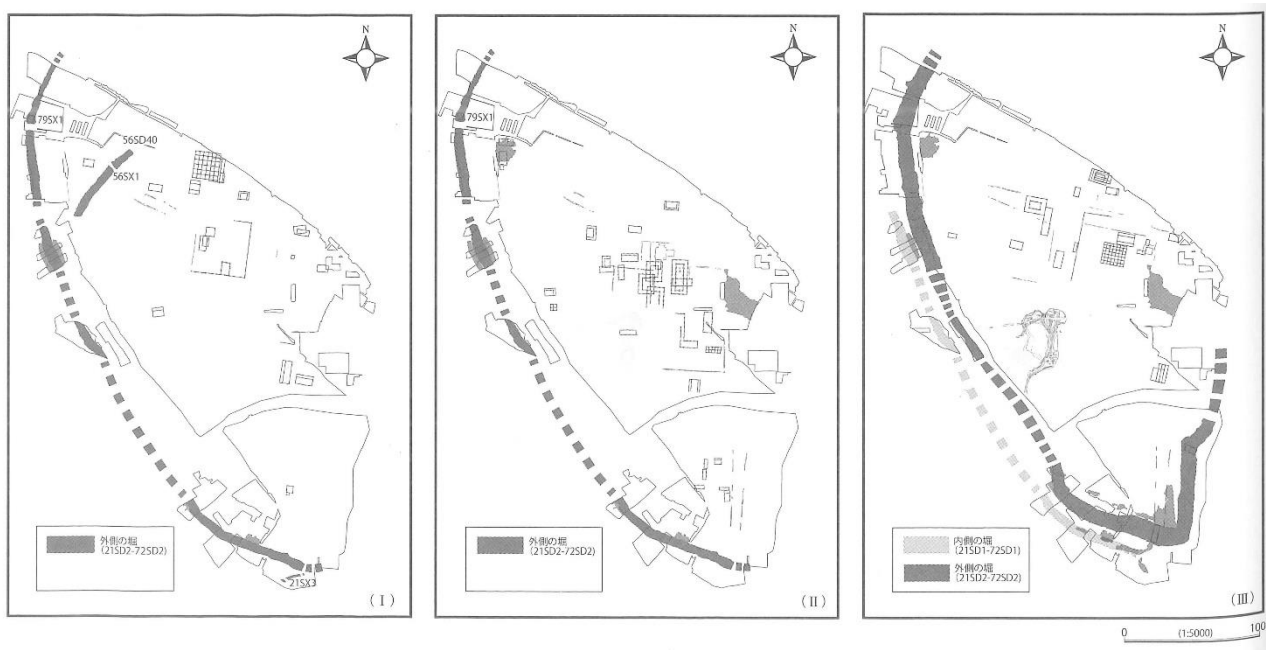
写真1 柳之御所遺跡の堀（東から）

写真左側が外堀、右側が内堀



し、外側の肩の部分は地形的に低くなるため外側の肩の部分が堀を作った際の土で整地しているところがあります。また、西側～南側では大規模な浚渫が行われています。内堀が作られた段階での外堀の様相は、南西側の一部では人為的に埋め戻していますが、それ以外の所はそのままにしていたため、窪みとして残り自然に埋まっていたようです。

内堀:大きさは幅 11～14m、深さ 2.4～3.6m、浚渫の痕跡はなく、自然堆積で埋まっています。南端部や西側の一部では堀を造った際に発生した土を堀の外側に整地した痕跡が見つかっています。また、内堀に橋が設けられている周辺の外堀は人為的に埋められている傾向があります。



第3図 柳之御所遺跡の堀の変遷図（岩手県教育委員会 2019）同報告書での年代は I 期 12 世紀前半、II 期 12 世紀中葉、III 期 12 世紀後半（1170 年前後から 1189 年頃）

## (2) 高館跡

高館は、北上川沿いに位置する標高 66m の小高い山で、南東側には柳之御所遺跡の堀外部地区が隣接しています。元禄二年（1689）には松尾芭蕉が訪れ、「夏草や 兵どもが 夢の跡」の句を詠み、源義経主従は奥州藤原氏の栄華を偲んでいます。頂上には芭蕉が訪れる 6 年前（1683）に伊達綱村が義経を祀るために義経堂を建立しています。

高館からは雄大な北上川の流れや、西行法師が「ききもせず 東稲やまの さくら花よし野のほかにかかるべしとは」と詠んだ東稲山を始めとする北上川東岸の山並みが見渡せる景勝地でもあります。

その高館の山麓に 12 世紀代の堀が巡っていることが近年の調査で明らかになってきました。見つかった堀の幅は 6～12m、深さは 1.9～2.5m 程ありました。土塁の痕跡は確



写真 2 高館跡の堀

認できませんでした。南東側や南西側では、斜面下方にあたる南側の肩部分を中心に掘削した土を盛った整地層が確認されています。



第4図 高館跡と柳之御所遺跡（岩手県教委 2019 に一部加筆）

### （3）奥州藤原氏の以前の区画施設について

中尊寺金色堂の周辺には、12世紀の整地層の下に、それ以前の区画施設が見つかっています。近年調査された釈迦堂北側の調査（89次）では、12世紀の整地層の下から幅4.4m以上、深さ1.3m前後の大溝が見つかっています。周辺で調査が行われた調査（中尊寺跡第17次調査、平泉遺跡調査会第Ⅱ期2・4次）においても類似した溝状遺構が確認されており、一連の溝跡であると考えられています。12世紀以前の中尊寺付近を考える上で注目される遺構です。



写真3 中尊寺跡 89次の大溝

おわりに

今回は、柳之御所遺跡と高館を中心に見てみました。北上川に接する東側を除いた三方を段丘の縁辺に沿う形で堀が巡り、その背後に高館跡が位置する形は、大鳥井山遺跡との関係性が伺えるのは先学の通りです。ただし、両遺跡ともに堀の外側に整地は確認されているものの明瞭な土塁の痕跡は見つかっていません。一方、奥州藤原氏三代秀衡が建立した無量光院跡では、南側以外の三方を土塁で囲み、西側には堀を巡らしています。無量光院跡は宇治の平等院鳳凰堂をモデルにしていますが、ただトレースするのではなく取捨選択しながら取り入れています。今後の検討課題ではありますが、平泉における堀と土塁の関係にせまることは、清原氏との関係性や背景を考える上でも大事なことと思います。

参考文献

岩手県教育委員会 2019 『柳之御所遺跡—堀内部地区内容確認調査—本文編』